C－62

能装束の文様と色彩について

熊本大教育　　和田ユキ

目的　第23回本学会において，主として能装束の種類と文様および色について概略を報告した。能装束の「色と文様」の美は日本の染織を代表するものであり，現存する装束類は，わが国の染織文化の貴重な遺産である。今回は能装束の文様の種類と色の出現率などについて調査を試みた結果を報告する。

方法　熊本県八代市の松井家に伝わる能装束について，写真撮影と日本色研発行の調査用カラーコードを用いて装束の地色および文様の色を調査した。また現存する代表的な能装束と正倉院に保存されている，上代における染織技術の粋を集めた染織工芸品を収録した原色版写真印刷の文献を資料に，文様の特徴を比較検討した。

結果　文様の素材は，宮廷を中心とした貴族階級の間に用いられた有職文様と中国から伝わつた染織文様，および古い伝統をはなれて近世に発達した自由な構成の絵文様の三種類に大きくわけることができる。文様は生物をテーマにした例が多いが，上代の染織品は動物文様，能装束は植物文様の出現率が高い。また色については装束の地色と文様の個々の色について調査を行つたが，カラーコードを用いて分類した結果，装束類の中でも，唐織，厚板，縫箔は一枚の装束に10～15種類の色が使用されていた。カラーコードの基本分類16圏の，ほとんど全領域に分布していることがわかつた。しかし多彩なために配色のバランスが崩れないように，色の濃淡，強弱など充分に考慮された上で，適切な色が有効に用いられている。簡素な白木の能舞台において，装束はその華麗さをあますところなく発揮するのである。